

vom ... Karte  
ISCHEN REICH

alkarten und astronomischen  
achtungen der Japaner:

vom  
v. Siebold  
1840.

*The discovery of the Japanese language  
by western people*

*—A historical survey of learning and study of Japanese—*

# 西洋人の 日本語発見

外国人の日本語研究史 1549~1868

杉本つとむ

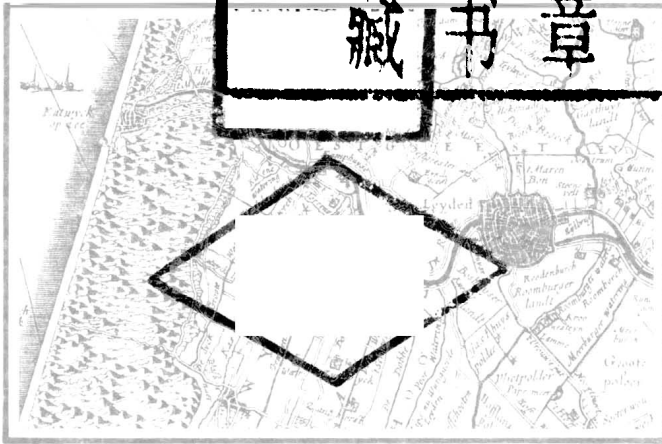
The discovery of the Japanese language  
by western people

— A historical survey of learning and study of Japanese —

# 西洋人の日本語発見

外国人の日本語研究史 1549~1868

江苏工业学院图书馆  
藏书章



西洋人の日本語発見

せいようじん  
にほんごはっけん

外国人の日本語研究史 1549-1868

© Sugimoto Tutoru, 1989.

一九八九年三月三十一日発行 ISBN4-87138-069-6 C0081

著者——杉本つとむ

すぎもと

発行者——井吹 晉

発行所——株式会社オンタイム出版創拓社

東京都千代田区三崎町一―三―十二 水道橋ビル五F 〒101

TEL〇三―二九一―六八四一（代表）

FAX〇三―二九四―二二八七

印刷——中央精版印刷株式会社

装丁——山口 仁

140  
I. 205

302

まえがき

生涯を日本語のためにささげた外国人たち——十六世紀より十九世紀にわたる——

うつくしき ほのほ に ふみ は もえ はてて ひと むくつけく のこり けらし も——会津八一

右は歌人、会津八一が親友、山口剛におくった大正大震災直後の短歌である。わたしはこれを、第二次世界大戦に日本が敗戦した折の感想と重ねあわせて、日ごろから愛誦している。

思えば世界の大国を向うにまわして井戸の中の蛙、日本は、無謀にもよく挑戦したことよと思う。鬼畜米英のことばと排撃した英語を、今や男女老幼を不問、町に村にまことに盛況な英語世界をつくりあげ、その学習に血眼である。まったく世は一変した。価値観も激変した。俗に敗戦の傷手はもう多くの日本人が忘却している。かつては母子もろとも断崖絶壁から身を投げて自決したサイパン島に、今は華やかな新婚旅行のための若い男女の歓声がひびく。

そして、さらにここ数年、大きな変化があらわれた。日本語を学ぶ外国人が急増しているというのである。

このごろにはやるのは公私の日本語教室や日本語学校である。にわかじこみ、一夜漬の日本語教師の群が粗製濫造と大量生産されんとしている。日本語が国際語になる？ と擬似知識人は大真面目に考え、信じ、テレビ・新聞・

週刊誌ととりあげている。かつて戦争中、東南アジアを武装した日本語で踏み荒した反省もなく、今度はむつかしい日本語を外国人向けに、簡約にし、人為的に加工して、学びやすい？ 日本語に変身させて、外国人に学ばせようというのである。

本書は過去における外国人、具体的にはポルトガル人、オランダ人、アメリカ人らの日本語観、日本語研究をとりあげて、その価値ある業績を世に紹介したいと考えて執筆したものである。本書によって、ヨーロッパやアメリカの人びとがいかに苦心して、日本語を学習し、かつ日本語の本質にせまらんとしたか、その苦難と真剣な日本語への学究の歴史が了承されると思う。日本人だから日本語がわかるなどと錯覚をおこし、外国人は日本語がマスターできぬときめつける日本人の思いあがり、反省材料を与えることができれば、筆者の目的は達したことになる。

過去において、唯一人、外国人の秀れた言語感覚、研究に敬意を表した学者がいる。しかも鎖国のまっただ中という悪条件下においてである。それは新井白石（一六五七—一七二五）である。彼はイタリー人宣教師、G・B・シドッチと面接の折の体験によって、はつきりと、（音韻の学のごときは、西方の長じぬるに及ばず。……誠に、彼方の字「ローマ字」を用ひて、我國の字母をしるさせしに、其字を結ぶ事、或は二合、或は三合して、其文をなす。（じよちゅうはんせつ）助紐反切之妙、得ていふべからず。……其精妙こゝに至れりと見えけり」とヨーロッパの高い学問体系と文化を見ぬいて、賞賛する。かかる発言をもつこそ、偏見なき真の学者の態度というべきであろう。まことに得がたい人物である。

ことばのうえで、これまで輸入超過であった日本は、これからは世界の人びとも理解してもらえることばとして日本語を磨きあげていく責任がある。素顔の日本語を素直に、しかも科学的に学習できるよう、日本語教授の方法をうちたてることが必須である。そのための一つの参考資料として本書を世におくりだすことにした。読書子の忌憚らない御批判と御感想を切望してまえがきにかえる。

目次

まえがき

主な東洋語・日本語学者、生没年一覧

凡例

第一章 キリシタンの世紀と日本語の世界……………9

- 1 サヴィエルと日本語 9
- 2 A・ヴァリニアーノと日本語 15
- 3 I・ロドリゲスの日本語学 18
- 4 日本語の構造と助辞 31
- 5 日本語、その品詞分類 43
- 6 日本諸国の方言、観察と記録 49
- 7 日本語の真髄・敬語の探究 53
- 8 手紙の書き方と作法 68
- 9 日本語文典と辞書の編集 75

第二章 オランダ人とその日本語学……………87

1 オランダの東洋語研究 87  
2 出島の商館長と日本研究 92  
3 商館長とその日本語観 97  
4 シーボルトとホフマンの出会い 108  
5 D・クルチウス『日本文法試論』 120

第三章 J・J・ホフマンとその日本語学……………131

1 ホフマンと『日本文典』 131  
2 日本語文法と語源研究 143  
3 ホフマン、日本語学の座標 161  
4 ホフマン、言語研究の方法 177

第四章 十九世紀ヨーロッパの東洋学者と日本語学……………183

1 ヨーロッパの東洋学者たち 183  
2 L・バジェスとL・ロニーの日本語学 194  
3 イギリス人宣教師と日本語学 207

第五章 幕末、宣教師と日本語研究……………221

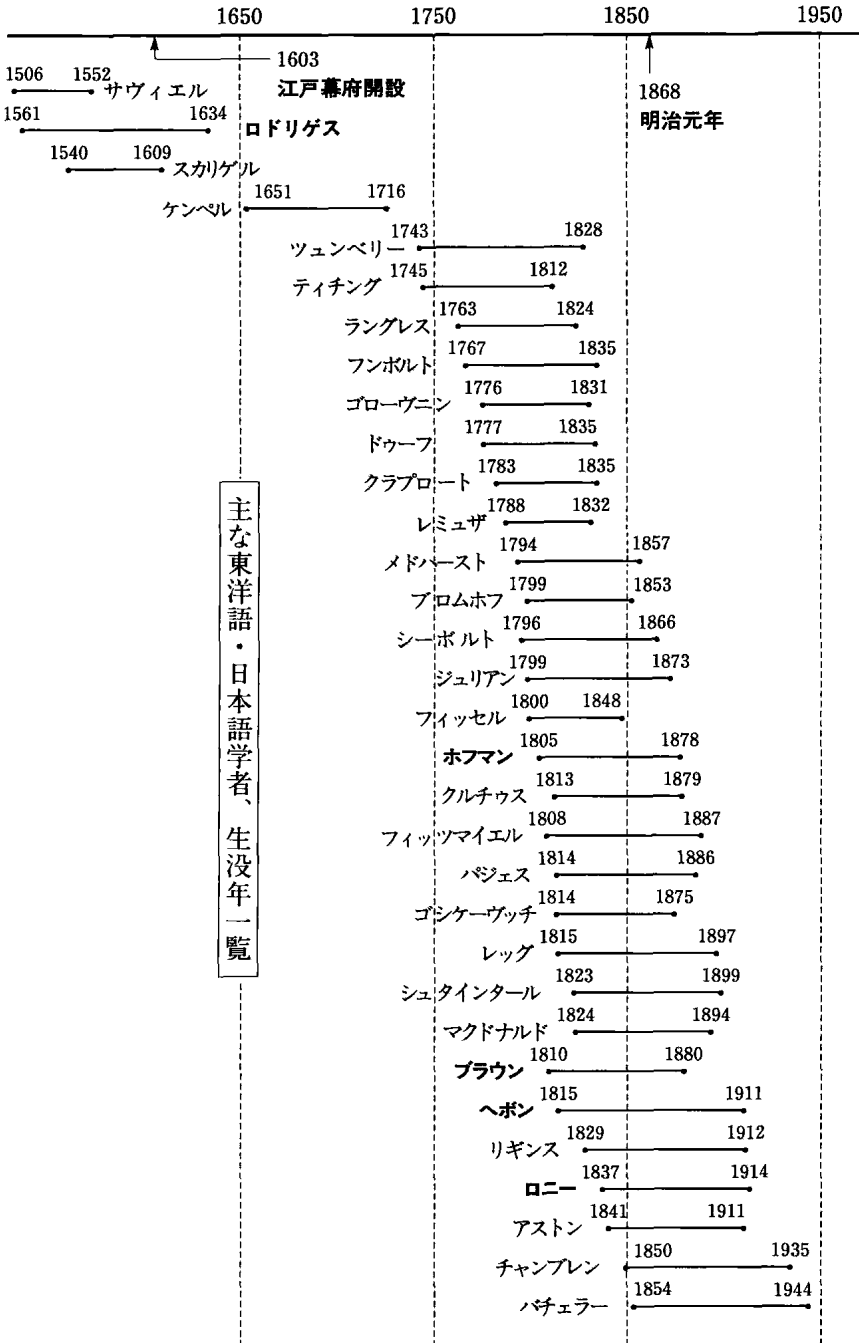
- 1 幕末の日本とアメリカ人宣教師たち 221
- 2 S・R・ブラウンと生きた日本語観察 231
- 3 聖書の翻訳と語学教育 245
- 4 J・C・ヘボンと和英辞典の編集 254
- 5 ヘボンと日本語と聖書 265

国際舞台へおどりでた日本語——まとめにかえて 273

主要参考文献 277  
あとがき 279

英文内容紹介 The discovery of the Japanese language by western people  
「西洋人の日本語発見」略年表  
図版目録  
索引





主な東洋語・日本語学者、生没年一覧

西洋人の日本語発見

## 凡例

- 一 引用にあたり、原文・訳文とも、漢字・仮名の字体は現行のものに改めた。
  - 一 訳文の表記・仮名遣など、私意によって一部改めたところがある（ただしローマ字はのぞく。また、若干の固有名詞や難語に読み仮名（ルビ）を与えた。（ ）で示すものがある。
  - 一 使用の符号のうち、留意すべきもの若干をつぎにあげて用法を示す。
    - へくく…引用。
    - \*、（ ）〔 〕…筆者の註記。
    - 『 』、 『 』、 『 』…単行本。
    - 「 」…雑誌、論文。
- ただし引用文中の符号などはすべて原本のままである。

## 第一章 キリシタンの世紀と日本語の世界

### 1 サヴィエルと日本語

#### サヴィエルの生い立ちと日本布教

一五三四年（天文三年）八月十五日、聖母マリア昇天を祝う日、パリのモンマルトルにある聖ディオニシオの小聖堂に七人の同志が集まった。彼らは、へ清貧、貞潔、（従順）の三つの誓いを立て、**法王**の先兵として、ヨーロッパにおける伝道はもとより、異国における布教と学校教育に従事しようと決意した。この同志的結合は、六年

後の一五四〇年（天文九年）、**法王**から公認されてイエズス会と名乗り、初代の教団長に、イグナチウス・デ・ロヨラ Loyola（一四九一？—一五五六）が選ばれた。このロヨラとパリのソルボンヌ大学で同学の士として研鑽に励んだのが、フランシスコ・デ・サヴィエル Xavier（漢名・方濟各）である。

サヴィエル（一五〇六一—一五五二）は、スペインとフランスとの国境にある小王国ナヴァラの城主ファン・デ・ハッスーの第六子として一五〇六年に生れた。ナヴァラのバスク民族は独特の言語と熱烈な信仰と強い独立精神をもつていられていた。しかしスペインとの戦いに敗れ、サヴィエルは名家の出として、教会の高位聖職、司教の道を選ぶ以外に方法はなく、やがて一五二五年、十九歳の

とき、ナヴァラを去ってパリ遊学を実現する。彼ははじめ、学者的名声と教会の名譽職とにひたすらあこがれた。サヴィエルは、肉体的にも体力は兼に抜きんで、運動能力があり、同時に理性と意志をもって、全人格を支配することができたという、すばらしい資質の持ち主であった。

サヴィエルはソルボンヌ大学で、哲学と神学とスポーツに多くの時間をついやし、友人と歓談のときをすごした。当時大学の道徳は弛緩し、学生はかなり放蕩な生活に青春をすごしていたようである。そうした中で、同郷の人でもあり、同室の学友でもあったロヨラと接触して、貴公子サヴィエルは彼の反復繰返す「聖教」に、はじめは嫌悪感をさえ抱き、交遊をさけていた。……が、はげしい二人の魂のぶつかりあいは、やがて相許す仲となり、黙想のうちに、サヴィエルはゆるぎない栄光の道をすすむ人となったのである。

こうしてサヴィエルはもつとも困難であり危険を予想される東洋への布教に積極的に加わることとなった。イエズス会結成の翌、一五四一年四月七日、サヴィエルはポルトガル三世の要請を受け、インド布教の旅にリスボ

ンを出航、約七年間、インドを中心に東南アジア・諸島の布教に従事した。そして、一五四九年（天文十八年）八月十五日、まさしくモンマルトルで同志誓約のときから十五年を経た同じ記念すべき日に、日本への第一歩を鹿児島に印することとなった。

サヴィエルがインドに到着した翌年に、例のポルトガル商船が台風に出あつて日本の種子島に漂着している。したがって、サヴィエルが来日のころは、ポルトガル船は鹿児島、山川、坊津など、九州の諸港に出入りしており、日本人もまた、海外渡航たけなわというべく、活気にあふれていた。サヴィエルの日本渡航には彼がマラッカ布教の折にヤジロー（アンヘロ、アンジローなども）なる日本人と出逢つたことが一つの契機をなした。一五四八年一月二十日附、ローマの会友あて手紙でサヴィエルはつぎのように書きおくっている。

わたしがまだマラッカにいる時、ポルトガルの信頼すべき商人たちが、わたしに重大な報知をもたらした。それは大きな島々のことで、東方に発見されてからまだ日も浅く、名を日本諸島と呼ぶのだという。商人た

ちの意見によると、この島国は、印度のいかなる国々よりも、遙かに熱心にキリスト教を受け入れる見込みがあるという。何故かといえは、日本人は学ぶことの非常に好きな国民であつて、これは印度の不信者にみることのできないものだといふ。この商人たちに、附き添われて、アンヘロと呼ぶ一人の日本人が来ていた。その故郷にいる時、ポルトガル人からわたしの話を聞いて、わざわざここまで来たのである。このアンヘロは、わたしに告白をしたかった。彼は青年時代に犯したある罪のことを、ポルトガル人にうち明け、重大なるその罪に対して、我等の主なる神から赦しの与えられる方法を求めたのである。そこでポルトガル人は、一緒にマラッカへいって、わたしに会つたらよからうとすすめた。(中略) アンヘロの喜びは、実に大きかつた。我等の信仰のことを聴きたいという熱望を持つて、わたしの所へ来た。彼はかなりのポルトガル語を話すので、わたしたちは、互いに了解することができた。

もし全部の日本人が、彼と同じように学ぶことの好きな国民だとすれば、日本人は、新しく発見された諸

国の中で、最も高級な国民であるとわたしは考える。

このアンヘロは、わたしの聖教講義に来てのち、信仰簡条の総てを自分の国語をもつて書き留めた。彼は度々教会へ来て祈りをなし、わたしに無数の質問を浴びせた。彼は、何でも、知り尽さずにはおかないといふ、強い欲望を持っている。これは進歩が早くて、短時日の間に、真理の認識に到達することのできる人物という、確かなしるしである。(中略) わたしが日本へ行けば、日本人は、豊富な理性の持ち主であるから、印度あたりの土民を相手にしているよりも、よく神へ奉仕し奉ることができると違ひない、というのが、日本から帰ってくるすべての商人たちの、一致した意見である。それで、わたしの心の中の動きを見ると、次の二年の間に、わたし自身か、またはイエズス会の他の司祭が、日本に行くことになるだろう、と考え始めている。その渡航がすこぶる危険であることは、覚悟の上である。日本では大旋風が吹き荒れるし、海上はシナ海賊船が横行しているからであつて、既に多数の船が、粉碎の厄に会っている(聖フランシスコ・デ・サビエル書翰抄)。

ヤジローことアンヘロは国内で殺人を犯し、マラッカに逃亡していたという。サヴィエルはヤジローにあってから、キリスト教の教理とポルトガル語を習わせるために、ヤジローをゴアの聖パウロ学院へ入学させている。

のちの日本伝道の際のよき通訳たらしめるためであった。とまれ、サヴィエルは、神父（パトリック）・修道士（イグナチオ）・ヤジローとその弟、下僕の五人をともなつて、いよいよ日本布教にのりだしたのである。現存する多くのサヴィエルの手紙を読むとき、サヴィエルがヤジローからきいた日本人像は正確であつたし、日本人が名譽を重んじ、とりわけ武士は金銭の前に頭を下げることない高潔の士であることに感動したようである。へ日本はキリスト教布教に最適の国であり、聖教を永遠に伝えらるべき国とロヨラに報じた。休む暇ない伝道のために、来日約二か月間で、五百余人の信徒を得た。こうして布教の本拠地は山口におき、着々と布教が成功していった。反面へ日本人が理性に従順ながらも、すこぶる知識欲にもえ、どしどし質問をするので、日本派遣の宣教師は、学問、特に哲学に通じ、弁証法にすぐれた人物でなければならぬとも強調している。

山口では二人の有力な信者を獲得した。そのうちの一人は吉利支丹（キリシタン）文学にもかかわりのふかい旧琵琶法師のロレンソ（洗礼名）である。才智は鋭く、記憶力は抜群、庶民への説教も巧みで、織田信長や豊臣秀吉など高官にも受けのいい、まことにサヴィエルには至上の日本人修道士（イグナチオ）であつた。あるいはバスコ・ダ・ガマ（Gama）の子、ドゥアルテが、ポルトガル船の船長として来日し、豊後の領主、大友義鎮（宗麟）に接近していたが、彼はここに多年、尊敬していたサヴィエルを招いて、キリシタンの一中心地とするよう斡旋している。サヴィエルの後援者はすくなくなつたのである。

#### サヴィエルの日本人観・日本語観

さて、サヴィエルは二年間、日本に滞在したわけだが、一五五二年一月二十九日の手紙で、つぎのように書きおこっている。

この日本の土地に大きな大学がある。坂東という多数の坊さんは、その教を学ぶために、この大学にゆ

く。その教説は、前にもいった如く、シナから来て、またシナの字で書かれている。何となれば、日本とシナとの文字は、大変違うからである。日本に二つの字の書き方がある。一つは男文字で、一つは女文字である。日本人の大部分は、男も女も読み書きができる。特に上流階級の者や商人などは、達者である。寺院の尼さんは、女の児に書くことを教え、坊さんは、男の児に教えている。また、上流階級の者たちは、その子供のために、家庭教師を置いている。

日本の大学、坊さん、文字、教育程度など、大いに関心を示しているわけである。しかも常に日本を中国人や中国語と比較しているのである。さらに、同じ手紙につづけてつぎのようにものべている。

ついでに一つ不思議に思われることを書いておこう。言葉が非常に異なるので、シナ人と日本人とは話をすると、お互いにわからない。けれども、シナの字を識っている日本人は、シナ人の書いたものを読むことのできるし、よく了解もする。しかしそれを話すと少し

もわからない。そのシナの文字を、日本の大学において教えている。したがって漢字を識っている僧侶は、学者として尊敬される。シナの文字は、各々一つの事物を現す。日本人はシナの文字を学ぶ時、その文字を書くと、その上にその意味を書く。例えば、文字が人間という意味である場合には、その文字の上に、人間の形を描くといった調子である。外の字も同じことだ。それで字が言葉となっている。日本人がそれを読む時には、日本の言葉で読み、シナ人はシナ語で読む。故に話すとはわからない。書くと文字だけでわかる。字の意味を知っているからである。しかし言葉は悉く違っている。私たちは日本語で、この世界の創造と、キリストの生涯のすべての玄義についての書物を著した。また、その同じ本を、シナ文字で書いた。これはシナへいった時、シナ語を覚えるまで、わたしたちを了解させることに役立つだろう。

現代ですら、同じ漢字を用いているゆえに日本語と中国語とは同じであろうなどと錯覚をおこしている知識人がいる。サヴィエルは漢字のもつ意味と文字の記号性、



ことばと文字の違いに明確な理解を示している点を確認しておきたい。

聖人といわれるサヴィエルにとって、いささか蛇足になるが、サヴィエルの日本人・日本語観と関連して、気になるところが手紙に散見する。すなわち、右に引用した手紙につづくつぎの一節である。

日本人は白人である。シナは日本諸島の直ぐ近くにあり、前にも書いたように、ここから宗旨〔仏教のことか〕が日本へ渡来した。シナは、膨大な国で、平和であり、戦争などはない。そこにいるポルトガル人の書いているところによると、そこでは、正義が非常に尊敬されていて、キリスト教世界の如何なる国よりも、<sup>（たゞ）</sup>義しい政治が行われているという。わたしが日本や、その他の国々で見たところに従って判断すると、シナ人はすこぶる教養が高く、日本人よりもさらに才子である。シナには物資が、あり余るほど存在している。人口が極めて多く、沢山の大都市がある。家屋は綺麗に彫刻された石を以て造られている。人々の言葉のごとく、この国には、種々の絹が非常に豊富にある。

いうまでもなく、サヴィエルが、中国を優秀な国とほめたたえることは第三者の口をさしはさむところではない。しかし、<sup>（日本人よりも才子である）</sup>という発言は、<sup>（日本人は白人である）</sup>という発言とともに、白人がアジアの有色人種を見下しており、人種差別と偏見の思想が底流として流れていることの証言といわざるをえない。

サヴィエルは中国行きの途中、広東付近の上川島<sup>（サンキヤン）</sup>で熱病にかかり、ついに雄図むなくこの東洋、南海の小島に骨を埋めることになる。